

## 審査論文要旨

論文提出者氏名： 岡田 拓朗

審査論文

題名： Carboplatin and docetaxel in patients with salivary gland carcinoma: a retrospective study

( 唾液腺癌に対するカルボプラチン、ドセタキセル併用療法の後方視的検討 )

著者： Takuro Okada, Takashi Saotome, Toshitaka Nagao, Tatsuo Masubuchi, Chihiro Fushimi, Takashi Matsuki, Hideaki Takahashi, Kouki Miura, Kiyooki Tsukahara, Yuichiro Tada

掲載誌： in vivo 33: 843-853, 2019.

### 【背景】

再発転移唾液腺癌に対する標準的な化学療法は確立していない。過去にはシスプラチンを含む治療法の報告が散見される。本研究の目的は、シスプラチンよりも毒性が少ないとされるカルボプラチンと、過去の報告の少ないドセタキセルとの併用療法について、効果と安全性について検討することである。

### 【対象と方法】

2011年から2018年の間に再発転移唾液腺癌に対してカルボプラチン、ドセタキセル併用療法を行った症例を後方視的に解析した。カルボプラチンはAUC 5、ドセタキセルは70mg/m<sup>2</sup>でday1に投与し3週毎に最大6コース投与した。治療効果判定はResponse Evaluation Criteria in Solid Tumors version 1.1 (RECIST 1.1)を用いて行った。有害事象の評価はCommon Terminology Criteria for Adverse Events (CTCAE) ver4.0を用いて行った。対象例について病理組織像の解析も行った。生存率の解析はKaplan-Meier法を用いた。

### 【結果】

対象は24例であった。観察期間は中央値19.7か月(範囲2.2~64.3か月)であった。組織型は唾液腺導管癌12例、腺癌NOS4例、筋上皮癌3例、腺様嚢胞癌、粘表皮癌、腺房細胞癌、基底細胞腺癌、低分化癌が、それぞれ1例であった。24例中18例(75%)で6コースの投与が完遂できた。治療効果はCR2例、PR8例、SD9例(long SD3例)、PD5例で奏効率は41.6%(10例)であった。病理組織別に最も症例数の多かった唾液腺導管癌では、CR2例、PR4例、SD3例(long SD1例)、PD3例で、奏効率50.0%(6例)であった。全症例でのprogression-free survival中央値は8.4か月、overall survival中央値は26.4か月であった。

Grade 3/4の有害事象として、好中球減少、貧血が約20~30%の症例で認められたが、管理は可能であった。

### 【考察】

再発転移唾液腺癌に対し、カルボプラチン、ドセタキセル併用療法は一定の効果があり、認容性も高く、治療選択肢の一つとなりうると考えられた。